

【論文】

モンゴルの「公民の倫理教育」の新カリキュラムに関する一考察

—2019年改訂のカリキュラムを中心に—

Bayasgalan Oyuntsetseg

はじめに

世界的潮流である国際化が進み、多様性が拡大する中、モンゴルで社会の安定と国民の連帯意識をどう醸成していくか、国民の共通の価値観や文化的アイデンティティーの育成をどの様に実現するかが問われてきた。2005年に公民教育がはじめて誕生して以来、「教科外活動」→「学習支援活動」→「必修科目」という経緯を辿りながら形成されてきた。公民教育のカリキュラムは、これまで4-5年のスパンで頻繁に改訂され、その位置付けは必ずしも系統的なものではなかった。

筆者は日本道德教育学会誌『道德と教育』に「モンゴルの道德教育の動向と課題-新学習指導要領における公民教育を中心として¹⁾」と題した論文を掲載した。この論文が2016年に掲載された後、公民教育のカリキュラムが再度改訂され、カリキュラム管理（編成、実施、評価、改善）を組織的に推進するための具体的な体制が示され、内容項目が再構成された。本研究は、上記論文の継続的な意味合いも含めて、モンゴル教育文化科学スポーツ省が公表した2019年改訂「公民の倫理教育」のカリキュラムの構成に沿って、指導項目、指導方法、評価の内容を取り上げながら、最新の動向を明らかにすることを目的としている。

1. 「公民の倫理教育」の誕生とカリキュラムの構成

モンゴルでは2019年が「公民の倫理教育」の年となった。「公民教育」が廃止され、「公民の倫理教育」のカリキュラムが新たに公示された。これにより公立私立を問わず全ての普通教育学校²の児童生徒が2019-2020年の学年から「公民の倫理教育」を学習することになった。カリキュラムの総則で「普通教育学校の教育史上、はじめて全学年の児童生徒が倫理教育を学習する総合的なプログラムが導入されたことに意義がある³」と強調されている。「公民教育」に「倫理」という語句を付け加え、公民教育と道德教育との結び付けを明確にしている。全学年で体系的な道德教育が構想されたことが画期的な転換といえる。

学校や学年を超えた教師同士の連携、カリキュラム評価の具体的な体制が示されていることも大きな特徴である。具体的には「公民の倫理教育を担当する教師がカリキュラムの内容、指導方法、評価、教材に関する意見を学期末に学習マネージャー（校長の下の管理職）に提出し、学習マネージャーが教師の意見をまとめ、県・ウランバートル市教育局に文書にて提出する。県・首都教育局が教師の意見を教育文化科学スポーツ省初等・中等・後期中等教育政策局に提出する。授業を担当する教師の意見が公民の倫理教育のカリキュラムとその実施に関する評価に値する⁴」と記載されている。カリキュラムの評価と改善を組織的に推進するカリキュラムマネジメントの体制と役割分担を明確化したことが大きな特徴である。

一方、カリキュラムは2か月という短期間で編纂されたことが報道されている。教材編集チームが同カリキュラムに基づき小学校用「モンゴルの礼儀作法と教養」教材（1年～6年）をわずか1か月という短期間で作成している。編集長が「良い教材を編纂するためにはもっと時間をかけるべきであり、わずか1か月間だけで良い教材ができあがったとは言いがたい⁵」と指摘していることから、教科書検定が簡素化され、検定や選択を受けることなく、編集チームを作り発注し、一方的に全国の小学校に配布されていること

が窺われる。カリキュラムでは教材のほか、読み物資料、教師用指導書、教師向け参考書（ガイドライン）、提言書、デジタル教材、プリント教材、保護者用学習提言書など、多様な教材が示されている。読み物資料は文学作品や小説を読み、理解し、話し合い、議論しながら児童生徒が道徳を身に付け、自己評価と分析を促し支援することを目的とする。教材にカリキュラムに示す内容項目に適したモンゴルの学者の教え、ことわざ、道徳に関する作品を取り入れ、加えて、道徳的諸価値の定義や意義などに関する説明、事例、答えが一つではない問いを盛り込むとしている。加えて「公民の倫理教育」のカリキュラムの内容を取り上げるオンライン授業を制作し、マスメディア、テレビで定期的に流すと規定されている。

「公民の倫理教育」のカリキュラムは、第1部「総則」、第2部「初等課程で育成すべき知識、技能、習慣の定義及び簡単な説明」、第3部「前期中等課程で育成すべき知識、技能、習慣の定義及び簡単な説明」、第4部「後期中等課程で育成すべき知識、技能、習慣の定義及び簡単な説明」、第5部「指導方法」の5部構成となっている。

「総則」では初等・前期中等・後期中等課程の学習計画、教育原理、目的、内容項目、指導方法、評価、教材、伝達活動の計8項目が立てられ、各学年の内容項目についてかなり詳細な解説が記述されている。教科編成および時間配当表をみると「公民の倫理教育」は社会科、地理、歴史科とともに必修社会科系教科目として設置されている。1年を33週とした場合、時間数は年間66時間、1単位時間は40分である。教師については小学校で学級担任、中学校で歴史、社会、地理、高校で歴史・地理、歴史・社会など社会科の教師が担当する。教師の自発的な学びを支援し、研究機会を提供するとともに集合研修を定期的実施することになっている。

以下、「公民の倫理教育」のカリキュラムの記述をもとに内容項目、指導方法、評価についてまとめる。

2. 「公民の倫理教育」の内容項目

総則において公民の倫理教育の中核目的は児童生徒の育成と道徳性の成長、「内容項目の柱はモンゴルの伝統文化である⁶⁾」、「父母、教師、高齢者、兄弟、他者を敬い、自分の過ちを自覚し、認め、他者を許し、優れた人格を備え、人道的な精神、思いやりの心を持ち、人生の意義を知り、人生の目的を正しく設定し、適切な方法で達成し、調和を重んじる生き方を好み、正しい考え方と広い視野を身につけ、他者に対しフレンドリーに接し、豊富な知識、人道的な精神を持つ公民を育成する⁷⁾」と記載されている。

内容項目が「自己を理解し成長させよう」、「他者を敬い喜ばせよう」、「伝統文化から学ぼう」の三つの領域から構成され、学年毎に区切られている。これは2学年毎に内容を集約している日本と異なる点である。初等教育でそれぞれ10項目、前期中等教育で8項目、後期中等教育で6項目が設定されている。系統的・発展的な指導が進められよう同心円的に内容項目が配列され、自己理解から他者、民族文化、社会に内容が広がる。小学校の内容は中学校、中学校の内容は高校の内容の土台となっており、学年を超えて教師が授業を共に準備し、共に実施するなどして密に協力することが求められている。

「自己を理解し成長させよう」領域は、自己理解を深め、行動、言葉、心を見つめ直すことを目的とする個人生活に関する内容、「他者を敬い喜ばせよう」領域は、他者理解を目的とする家族、学級、学校、地域の住民、社会生活に関する内容、「伝統文化から学ぼう」領域は、モンゴル民族の特徴を理解させるための内容、国家生活に関する内容から構成されている。

表1 内容項目の範囲

領域	内容	範囲
自己を理解し成長させよう	自己理解、自分の行動、言葉、心を見つめ直す内容	個人生活
他者を敬い喜ばせよう	他者理解に関する内容	家族、学級、学校、地域の住民、社会生活
伝統文化から学ぼう	民族の特徴に関する内容	国家生活

出典：モンゴル教育文化科学スポーツ省『公民の倫理教育のカリキュラム及び指針』2019年、193頁。

具体的には「自己を理解し成長させよう」領域は、自分の長所と将来の可能性を把握し、伸ばす等の内容になっている。自分のことを理解し成長させる内容の他に、和を大切にし、友情を重んじ、熱心に勉学に励む等、育成すべき知識、技能、習慣を含んでいる。児童生徒は自分の身口意（行動、発言、意識）による良し悪しを見分け、善行を実践し、習慣化し、悪行を慎み、感情を制御し、正しい身業と口業を行う方法を学習していく構成がとられている。「他者を敬い喜ばせよう」領域は、他者を敬い、喜ばせ、父母、教師、親族、地域の住民、高齢者に対する敬い、他者理解、コミュニケーション能力に関する内容から構成される。感情を正しく制御・表現し、他者から学び、感謝し、許し、他者の勤労を尊び、勤労に真心から効果的に取り組み、社会で共に生きる上で必要な行儀作法について学ぶ。「伝統文化から学ぼう」領域は、他民族から異なる特徴を表す伝統・習慣、畜産業、家畜の飼育、生活様式を学び、系譜を知り、旧正月などの祭典行事を正しく執り行い、モンゴルの有形・無形の文化財について学び、他者への配慮や世話、思いやり、陰陽の考え方、自分の心と向き合い、自分の考えや言動について省み、習慣化する等、モンゴル人が必ず認知し、勤労と生活で習慣化し、大切にすべき価値観から構成されている。

以下の表2で、小学校1年生の内容項目について示す。

表2 小学校1年生

1. 自己を理解し成長させよう	
1.1. あいさつの仕方	
あいさつの仕方、種類、違いを知り、正しく挨拶し習慣化する	「日常と季節の挨拶、尊敬の念を込めて挨拶する言葉・表現を知り、正しく使い、習慣化する」、「礼儀正しい挨拶が他者を敬い、親切なおコミュニケーションを生むことを理解する」、「真心から挨拶し、尊敬の気持ちを態度に表す」、「高齢者と挨拶する、挨拶を返す」、「年少者と挨拶する」、「同年代の人と挨拶する」、「社会で他者と適切に挨拶する」、「お客と正しく挨拶する」
1.2. 勉学に励む	
授業を注意深く聞く	「勉強時の正しい座り方を身につける」、「授業を注意深く聞く意義を理解する」、「授業を注意深く聞くための方法を理解し、集中する方法を学び、習慣化する」
授業を正しい心で聞く	「授業を正しい心で聞く意義を理解する」、「授業を正しい心で聞く方法を学び、習慣化する」
授業で学んだことを自分のものにする	「授業で学んだことを自分のものにする意義を理解する」、「授業を自分のものにする方法から学び、習慣化する」
2. 他者を敬い喜ばせよう	
2.1. 良い児童生徒	
教師、父母、保護者、高齢者の言葉と教えを聞く	「言葉と教えを聞く意義、聞かない場合の悪結果を理解する」、「言葉と教えをどのように聞くべきか」
教師、父母、保護者、高齢者の言葉と教えを考える	「言葉、教えを常に考える」、「彼らの言葉の正しさと間違いを識別する」、「日常的行動を言葉と教えと比較し考える」
教師、父母、保護者、高齢者の言葉と教えを守る	「教えと言葉を聞いて、自分の言葉、行動、心で実践し、習慣化する」

2.2. 教師を敬う習慣	
教師を敬う理由、意義、敬わない場合に生ずる悪い結果を理解する	「児童生徒の知識が教師から生まれることを理解する」、「教師と児童生徒が心身ともに穏やかで幸せに暮らす」、「教師を敬わないため問題が発生し、自分の目的を達成できなくなることがある」、「行儀悪くなることがある」
教師をどのように大切にすべきか	「教師の教えを大切にする」、「教師の恩に報いる」、「教師の恩を常に考える」、「言葉、行動、心で常に教師を敬う」
教師とどのように接すべきか	「教師に質問し確認する。教師と話し合う時に怖がらない」、「教師に嘘をつかない」、「教師も児童生徒を尊敬していることを理解する」、「間違った言葉を言ったり、間違った行動をしたりした場合、心から許し、後に、適切なタイミングを見計らって、再確認し、理解・納得させることを学ぶ」
3. 伝統文化から学ぼう	
3.1. 家畜	
家畜の種類、年齢、性別を知る	「伝統的な畜産の方法を知る」、「大型・小型家畜を識別する」、「家畜の子を正しく識別する」、「親家畜を識別する」、「家畜の恵みを知る」
3.2. 伝統的なモンゴルの祭りと行事	
旧正月、子どもに関係する行事から学ぶ	「大晦日の行事、元旦の儀式について知る」、「挨拶の仕方、挨拶の言葉・表現を知る」、「父母や祖父母に挨拶する人の親族関係を確認する」、「旧正月の意義について理解する」

出典：モンゴル教育文化科学スポーツ省『公民の倫理教育のカリキュラム及び指針』2019年、33-34頁。

各学年の内容項目の範囲が、①個人生活、②家族、学級、学校、地域の住民、社会生活、③国家生活という三つの視点で分類されている。この枠組みに沿って指導内容の連携性や児童生徒の発達段階を考慮した指導を行うと明示されている。

3. 「公民の倫理教育」の指導方法

旧カリキュラムで記述されていた「道徳性の諸様相」の定義⁸が削除され、総則で「道徳性の育成のプロセス」について次のように定義されている。道徳性は「聞いて理解する」、「探究して理解する」、「生活で実践し習慣化する」という基本行動を通じて育成される。「聞いて理解する行動」とは個人の生活と社会生活における倫理観、それに関する読み物資料を注意深く、正しい考え方で念入りに聞いて理解することをいう。「探究して理解する行動」とは既習内容を復習し、思考し、探究し、その中から必要なものを自分自身で取捨・選択し、整理し、最終決定し、理解することをいう。「生活で習慣化し実践する行動」とは学習したことを日常生活の行動の中で応用し、さらに習慣化し実践することをいう。児童生徒が授業と他者の話を注意深く聞き、自分自身の考えと気持ちをよく考え、探究してから他者に説明し、質問し、自分の周りの環境、ひいては人々の生活の実態について深く思考し、学習したことを自分の感覚、考え方、身口意（行動、発言、意識）による行為と比べて考え、正しいことを生活で実践するようになる。「探究して理解する行動」とは、よく考え、他者に質問し、答えを探し、結論を出し、他者と議論し、根拠に基づいた原因を調べ、評価し、受け入れ、説明し、想像・推測し、正しい考え方を身につけ、自分の考えを証明し、的確に表現する能力が含まれる。

以上の記述から学習の展開は、まず教師の説明による知的理解→探求活動→実践という展開過程をたどると定義されているといえる。「聞いて理解」の段階では、ある内容項目を教師が児童生徒に話して聞かせる指導方法が用いられると推察される。講義・講話などもこの一種である。学びのプロセスが、児童生徒が内容項目について教師の話を通じて知識として理解した上で、次のプロセスである調べ活動を通じて行動・実践するという構成となっている。

公民の倫理教育で児童生徒が倫理・道徳を学習する方法を自らまたは他者と共に作り上げるように導き、助言し、支援し、学びの作法を身につけるための指導方法に重点を置いている。そのために「内容項目を反復し持続的に指導する」、「生徒同士で意見を出し合い、対話する機会を設ける」、「多様な資料を用いる」、「主に読み物資料を活用する」、「他者の意見を尊重しながら聞く姿勢を育成する」、「新学年の初めに前学年で学んだ知識、能力・技能、習慣を診断し、既習内容を復習させ、学習強化を図る」、「自己理解を深め、自由に自分の意見を表現する機会を提供する」、「道徳規範を守っている具体例を示す役割演技をする」、「授業前にウォーミングアップをする」など、指導上の留意点が数項目にわたって明示されている。

重点的な指導方法について、以下の三点に集約することができる。

- ① 内容項目を様々な角度から繰り返し説明し、道徳的価値の意義を理解させ、児童生徒に決断させ、道徳的行為の実践と習慣化を促す。
- ② 日常生活の具体例を取り上げ、話し合い、議論、ディスカッションを促す。
- ③ 面白さ、楽しさ、喜びを感じさせ、学ぶ意欲を高め、自分自身を見つめ、自ら変わっていくように導く。

以上の指導方法から話し合いや討論などを中心に考えさせ、児童生徒に感銘を与え、意欲を高めるなどの情意的側面にも留意しながら実践・習慣化を図ることが狙いとされている事が窺える。

道徳性の育成のプロセスを効果的に運営するために、教師がどのような働きかけと行動を行えばいいのかについては、第5部「指導方法」で各教育課程における児童生徒の発達段階に応じた指導の留意点について詳細な解説がされている。各教育課程に共通する教師の働きかけに関する記述を、以下の五点に集約できる。

- ①教師が児童生徒と信頼関係を醸成し、個々の児童生徒に親切に接し、自ら模範を示す、②教師が「児童生徒の道徳的諸価値の内面化と習慣化」の観点を常に重視する、③道徳性を養うのに児童生徒の思考の他に、児童生徒の

心情と感覚に留意する、④児童生徒の意見、質問、思考を受けとめる安心な空間を用意する、⑤教師が児童生徒と話し合う際に即断することを避ける。上記内容は、教師と児童生徒間の相互作用や教師の言行及び態度などについて教師自身が認識すべき点として捉えることができる。

そのほか、学校が保護者や地域の住民に向けて公民の倫理教育に関する勉強会と助言などの「伝達活動」を特定のスケジュールに基づき定期的に行うと規定されている。伝達活動は、「教師管理時間⁹」を通じて初等課程の場合、週に2時間、前期中等・後期中等課程の場合、月に2時間、義務付けられている。加えて、「保護者向けの教材開発」も推奨し、「子どもと一緒に保護者が学べる画期的で意義が高いカリキュラムが編成された¹⁰」とカリキュラムで強調されている。

4. 「公民の倫理教育」の評価

評価に関しては、従来の公民教育と同様に記述式の評価方法が踏襲され、自ら学習する方法を作り上げていく過程を導き、児童生徒に助言し支援することを重視している。この記述から評価は、学びの導きと励ましとして行われるものであることが窺われる。具体的には、自己評価、他者評価を取り入れるほか、診断的評価、形成的評価、年間評価、善行評価方法を用いとされている。診断的評価の目的は当該学年の初めに児童生徒の前学年に学習した道徳の知識と技能、習慣を確定することにある。診断的評価を学級担任と公民の倫理教育の授業を担当する教師が共同で前学年の六つの単元で行う。

表 3 診断的評価方法

教育課程	方法		評価者	結果
初等課程	質問紙、観察	詳細な評価指標を作成する。	保護者 学級担任	教師が診断結果について教師用記録簿に要点を記録し、「公民の倫理教育」と他科目の指導で、児童生徒の学習した道德の知識、技能、習慣として活用する。
前期 中等課程	質問紙、面接、テスト、観察	詳細な評価指標を作成する。一つの評価方法あるいはいくつかの方法を組み合わせる。保護者と共同で診断することができる。	学級担任 授業を担当する教師	
後期 中等課程	マインドマップ、作文、面接、自発的なボランティア活動、観察			

出典：モンゴル教育文化科学スポーツ省『公民の倫理教育のカリキュラム及び指針』2019年、55頁。

形成的評価は授業の過程で児童生徒の学習する知識、技能、習慣とその変化を評価し、道徳性の形成を促し、支援することを目的とする。「観察」、「単元評価」と二つに分類される。授業中に教師が観察を行い、児童生徒を励ます言葉を用いる。自分の考えを表現し、然るべき根拠に基づき自分の考えを説明、立証し、例を挙げて紹介するなどに必要な知識、技能、習慣の成長を教師が常時観察し支援し評価する。各領域や単元の評価を児童生徒の自己評価、級友、教師、保護者の評価の合計で行う。評価者の割合について表4で示す。

表 4 各領域や単元の評価

教育課程	評価者のパーセンテージ				合計	結果
	児童生徒	保護者	級友	教師		
初等課程	10	30	20	40	100	教師が詳細に作成した指標に基づき単元の評価を行い、学級記録簿に記入する。
前期中等	20	20	20	40		
後期中等課程						

出典：モンゴル教育文化科学スポーツ省『公民の倫理教育のカリキュラム及び指針』2019年、215頁。

今回のカリキュラムで善行評価が導入され、善行となる行動が児童生徒に提示されている。具体的には児童生徒が「級友を正しい習慣を学ぶように呼びかけた活動を自発的に行った場合」、「家族、学級、学校で模範となる道徳的行動を行った場合」、「人道的な活動を行った場合」、または「感謝記録」（他者を手伝い、喜ばせたことに対する他者からの感謝の気持ちを記したもの）などをもとに善行評価を行う。特に優れた善行を行った（病人や困っている人を助け、他者と動物の命を救った等）児童生徒については学校、区、県、首都の「善行児童生徒」として公表しその榮譽を称える。

以上のように、新学年の指導に先立って行われる診断的評価、実際の指導過程における形成的評価、学年末に指導の区切りで行われる年間評価、善行評価など、学習のあらゆる段階に評価が行われることになっている。

5. 結びにかえて

2019年度の改訂は、初等課程から後期中等課程まで一貫した道徳教育を徹底して行うようにした点と、小中高連携による系統的な取組と内容項目の体系化に貢献した点で意義は大きい。この点についてカリキュラムで「教育史上画期的なこと」と指摘されている通り、公民教育史上最大の改革が進められようとしている。「公民の倫理教育」には、これまでのカリキュラムと異なるいくつかの大きな特徴がみられる。以下、本研究で明らかになった内容構成、指導方法、評価、学校と地域の連携・協働に絞って公民教育の性格と特徴、今後の課題について検討を試みることにしたい。

内容構成について、次の二つの特徴がみられる。

第一に、教育目的が徳目に関する知識としての理解と態度・実践に関する内容から構成され、「聞いて理解する」、「探究して理解する」、「生活で実践し習慣化する」という基本行動を通じて道徳性が育成される、と定義されている点に特徴がある。態度、実践、習慣化が知的理解を前提としており、「理解」、「実践・習慣化」という順に、学ぶべき徳目や態度が箇条書きで記述され、知的側面と実践側面の統一的な展開を目指している。この枠組みは

2005年以降の公民教育の目的を踏襲するものである。

第二に、全体的な目的の構成を見れば、公民的資質の基礎を育てようとしている。内容項目が日常生活での基本的な礼儀作法など、個人の生活に関する項目と、民族文化と精神という大きく二つの項目に分かれている点に特徴がある。この点についてカリキュラムで「内容項目の柱はモンゴルの伝統文化である」と明確に定義されている。良識ある公民として必要な技能と態度は伝統文化の学習に大きくかかわる。「伝統文化から学ぼう」領域が全学年に継続的に反復されて登場する。伝統文化を通じた見方や考え方を知識として教授しながら道徳的な価値観を内面化させ、態度育成につなげることが意図された内容になっている。国家・社会の発展と国民育成の基盤となるのがモンゴル独自の伝統文化である。モンゴル人としての自覚を持って伝統文化に親しみ継承する国民が国家の発展に努めるという倫理観が見てとれる。伝統文化重視の背景には、価値観が多様化する中で社会の健全な発展のために人々を結びつける共有の価値観の必要性が議論されていることが挙げられる。

他方、内容構成からみれば、現代社会の倫理的問題の認識について十分に享受しておらず、伝統文化が優先的に位置づけられている。その背景には上述した通り、「公民の倫理教育」の目的に強調されている「内容項目の柱はモンゴルの伝統文化である」という観点があるからだと考えられる。このような観点は現代社会の問題認識とは別に伝統文化を理解・習慣化させることで価値観形成を目指している。情報化社会におけるマナーやいじめなど社会的な問題を積極的に扱っている韓国の道徳教育¹¹や、児童生徒に読み物を読ませて登場人物の気持ちを考えさせるような教育から、問題を見いだして解決策を考えたりする「深い学び¹²」を目標としている日本の道徳教育を参考に、伝統文化と同時に、児童生徒の生活の実態に応じた授業展開、例えばモンゴルで深刻化しつつある環境汚染や交通・ゴミ廃棄マナーなどを取り上げ、現実社会における様々な問題について理解を深め、多様な立場に配慮しながら考えさせる学習活動も必要であろう。

指導方法については、これまでのカリキュラムより強調されている二点に

注目したい。

第一に、主体的な探求・学習習慣の確立を掲げている点で、従来のカリキュラムと同様であるが、学びの作法を身につけるための指導方法により重点が置かれている。指示されたままに行動するよう指導するのではなく、自ら学べる自立的学習者、ひいては主体性のある国民の姿勢が「公民の倫理教育」で養うべき基本的な特質であるといえる。したがって、児童生徒が自分自身の価値観を形成し、自己評価を通じて学んだことを繰り返し学習し、自己の価値観を吟味するような指導が求められている。

第二に、内容項目の接続についてである。長期的なスパンの中で道德性の成長を捉え、学年相互の連携と学校間のつながりを踏まえた編成になっていると評価できる。学年間で児童生徒の学習の成果が円滑に接続できるよう全教職員が共通理解し、一丸となって推進する重要性について強調している。各学年において前学年の公民の倫理教育を通じて育まれた知識、技能、習慣を反復学習しながら受け継ぎ、さらに強化すること、学年の枠を超えて教師同士が連携協力することが求められている。これは公民教育の実施状況を評価しその改善を図って行く上で重要な取り組みである。前学年の学習成果をその後の学年に評価することで、児童生徒が自己の育成や今後の学習課題を実感できるという観点から重要であると考えられる。

評価については、従来のカリキュラムと共通している点は、成績評価ではなく、学習した内容がどれだけ定着しているか、児童生徒が自分自身の道德的成長を確認できる自己評価と、他者評価を取り入れることで道德性の成長を促すことが期待されている点である。今回の改訂によって新たに取り入れたのは、善行の評価である。ボランティア活動などの社会奉仕の精神と体験を称え、学習・実践の過程を重視して編成されたカリキュラムになっている。これにより、評価は学校生活だけに限られたものではなくなっている。家庭や社会における具体的な善行となる行動が提示されている。善行評価は知識を生活の場面で活用し、生かそうとする力を高め、主体的に道德的な実践を行う意欲を喚起する上で有効であると考えられる。

最後に、これまでのカリキュラムと異なる家庭・地域との連携、いわゆる「伝達活動」について取り上げたい。学校が定期的に公民教育の方針や児童生徒の状況などを家庭や地域社会に説明し、積極的に相互の意思疎通を図ることが求められている。子どもの基本的な生活習慣や態度をどう育てるかについて一緒に考え、家庭教育を支援し、公民の倫理教育に関する保護者の理解・知識を高めることを目的とする保護者向け勉強会の時間が確保されている。学校側から見れば、公民教育に関する保護者及び地域住民その他の関係者の意向を把握し、理解を深め、協力を得るとともに、彼らの参画を促す活動となっている。他方、家庭や地域側からみれば、学校への願いや質問等を伝え、公民の倫理教育の取組みに関する情報の提供を受ける場となっている。このような伝達活動を通じて保護者や地域住民の公民教育に関する意識が高まることが期待できる。

本研究で分析したのはあくまでも文書化された「公民の倫理教育」のカリキュラムの目的、内容項目、指導方法、評価に限定しており、その背景となる理論を分析していない。今後は、教育現場における実践などを通じて、本研究で取り上げた同カリキュラムの特徴をさらに究明し、多角的に研究を推進していく必要がある。

注

- 1 「モンゴルの道徳教育の動向と課題—新学習指導要領における公民教育を中心として」日本道徳教育学会学会誌『道徳と教育』第334号、2016年、17-28頁。
- 2 普通教育学校とは、初等教育と前期・後期中等教育を行う12年制学校をいう。義務教育は6-15歳の9年である。初等教育は5年間、前期中等教育は4年間、後期中等教育は3年間行われる。
- 3 モンゴル教育文化科学スポーツ省『公民の倫理教育のカリキュラム及び指針』2019年、12頁。
- 4 モンゴル教育文化科学省、前掲書、30頁。
- 5 「ikon.mn：Next Horizon」新聞、2019年10月8日。
- 6 モンゴル教育文化科学スポーツ省『公民の倫理教育のカリキュラム及び指針』2019年、10頁。

- 7 モンゴル教育文化科学スポーツ省、前掲書、9頁。
- 8 2014年度学習指導要領参考書では「道徳性は道徳的心情、道徳的判断力、道徳的实践力、道徳的態度というプロセスを通じて育成される」と定義している。道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度に関する定義の記述が日本の道徳教育の学習指導要領の定義に酷似している。
- 9 「教師管理時間」は、勉強の遅れの取り戻しや復習、サークル、部活、児童生徒および父母に対し「公民の倫理教育」やその他の教科に関する助言を行い、教育目的を達成するために必要な教科以外の教育活動の時間である。教師が主体的に立案することが認められる活動であるので「教師管理時間」という名前を付けている。年間144時間が配当されている。初等教育で週に2時間、保護者向けの公民の倫理教育を行うことになっている。
- 10 モンゴル教育文化科学スポーツ省、前掲書184-185頁。
- 11 関根 明伸「現代的課題」に向き合う道徳教育の方向性—韓国・道徳科の事例を中心に—」日本道徳教育学会学会誌「道徳と教育」第59(333)号、2015年、134頁。
- 12 「平成29年度小・中学校新教育課程説明会（中央説明会）における文科省説明資料」2017年、22頁。

A Study on New Curriculum of “Civil Ethics Education”
in Mongolia
—Focusing on the Curriculum Revised in 2019—

Bayasgalan Oyuntsetseg

ABSTRACT

The purpose of this study is to clarify the characteristics of the curriculum of “Civil ethics education: 2019 revised edition” in Mongolia. The features of the curriculum are as follows: (1) Ensuring the consistent moral education from the primary course to the second half (secondary course), (2) Systematic efforts by coordinating elementary, middle and high schools and systematizing content items, (3) Continuing the traditional logic of civil education that emphasizes the traditional culture and customs, and build the foundation of civil qualities, (4) Clarification of a concrete system to promote the curriculum management (curriculum structure, implementation, evaluation, and improvement) systematically, (5) Proposing the role of school to the family through guidance and advice to parents, (6) Presenting mimicry behavior of good deeds to children and introducing good deed evaluation. In the future, it is necessary to analyze the content items and educational methods by using the description of the teaching material of “Civil ethics education” as a clue and promote the research from multiple perspectives.

